

瞬刊
The Moment

八下回

2009
9/18
65



神
山
昇
也

今日のパッケージ

午後11時ⁱⁿ～

フリースペース

大房さん

ハイロの上映会は、誰のどんな作品でも上映する、上映後に作品について観客と共に語り合う、をテーマに生まれて続いてきた。

まず、『シネマフェスト』があった。観客と作者がもう少し深く語るためには、企画上映もしようということになった。その流れで生まれたのが、『フリースペース』。

「街を歩いていたら、映画を上映する空間があった、ちょっと寄ってみた。」とか、「フィルムを持っていたから、上映してみた。」というような、日常の感覚に近い上映会をやろうというテーマで1980年ごろから始まった。

80年代の後半は『フリースペース』だけで毎月開催していたこともある、いわば『シネマフェスト』に続く由緒あるコーナー。

言ってみればハイロの精神ここにありで、まな板に乗る覚悟のある者、来い来い。他で認められない変人、来い来い。まだ見ぬ作者、来い来い。なのだ。

そして2009年の碑文谷。『フリースペース』は時間枠を60分から90分に拡大した

もう一度「作品を持ち寄って語り合おうよ」という原点から再スタートだ。

(応募は希望日の2週間前までに)

junofusa@kt.rim.or.jp または dodonga2-5-5@hotmail.co.jp

大房さん プロフィール

本名大房潤一（おおふさじゅんいち）。映像ディレクター/VJ/大学講師

80年代にビデオアートのことをはじめて以来、映像業界に居る。

90年頃よりハイロ代表になり細々とフリースペースを運営していたが、いろいろなメンバーが増えて活動も活発になったので今は事務局長的役割。会計や連絡係、Web運営などをやっています。

今月の参加作品

『脈動』田中里美 DVD 3分

ただ生きればいい

私は自分で自分を苦しめていた。

拭っても浮かぶ不安をまた拭うという繰り返しの行為。それは何にもならない、ただただどんどん苦しんでいく、死に向かう行為だった。そのうち実際の死は私の希望となる。

そこに生きているだけの猫がいる。

彼女は15年以上を生きている。

カメラを向けている間、その間に死んでしまうような気がした。彼女は向かってくる老いと、静かに闘っていた。

自分という敵には勝てない。それでも私は、苦しんでいることに苦しむのはやめようと思った。

やっと何かに腹をくくった私の、これからの指針となった作品です。さらにこの先をめざしていきます。

『8月10日から』YOO DVD 約7分

7月のハイロ上映会の次の日から、☆さんに助けられながら毎日1分を撮影してきました。

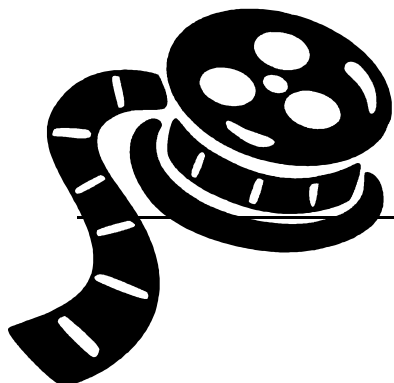
毎日1分を撮影していくうちに、大事な事を忘れていたのが解かりました。小手先の編集をしても、気持ちのこもらない映像の羅列が繋がるはずはありませんでした。情念の風景が自然と見えてきて、貴重な1分になり、次の日に繋がっていきました。毎日1分。

『ぐるるん』村田幸代 8mmフィルム(音はCD) 8分20秒

ぐるぐるぐるるん♪ぐるぐるぐるるん@ぐるるん
ころがりました・・・

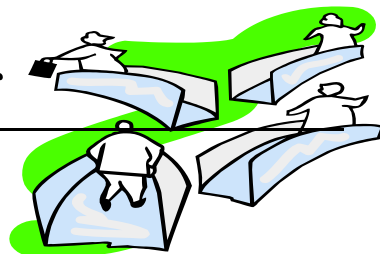
『やっぱり猫』ほしのあきら 8ミリ 23分

1968年作品。今回からしばらく遺言シリーズをやろうと。これは自主映画処女作。元はダブル(レギュラー)8ミリ。メタ映画目指したけどごっこ映画になっちゃって、“映画みたいだ”と友人に言われ、違う!と思った・・・ハイロ結成前に渋谷へアー(後のアピア)で上映してボロクソ・・・言ってみれば全ての原点、やるぞという決意・・・みたいなよね。だから、きっとロマンチック好き。



午前1時15分～

出張クラブ マエダシゲル



でも、お父さんはどうゆうえいがをつくりたいかわかりません。(娘より)

たくさん撮っているみたいでけど、よく付き合っていないからわからない。(息子より)

ショックじゃないと言えば嘘になるが、映画は作りたい。でも仕事から長距離出張が多く、幼子三人を養うサラリーマンの私には、既成の方法では映画は作れない。

作る意志を奮い立たせなければ「わかりません」で終わってしまう。だから、私は、自分の生活の流れの中で映画を作ることを積みかさねる。「出張クラブ」は、出張先でカメラを廻す、子どもと散歩しながら撮影をする、(今回子どもを撮りました)そしてたどり着いた、普遍的な日常映画です。

なにものにも縛られず自由に映画を作る社会人、高校生、大学生。映画作品そのものより、そういう人達を作る映画を個人映画と呼ぶと、実は今も信じています。(話し相手:鈴木所長、和海君)

マエダシゲル・プロフィール

本名 前田茂(まえだしげる):スーパー8の出張映画作家

初、自家用軽自動車で鹿児島まで往復。片道28時間。遠いよ鹿児島。その鹿児島から就職上京した両親から生まれた一人っ子。堀越高等学園卒業後、東京映像芸術学院卒業、日本TVのAD、PFFの映写技師、同学院の事務、大田青果市場、築地魚市場、文芸座映写技師、ビデオ屋の定員、向丘遊園地のアトラクションオペレーターを経て、同時通訳のオペレーター。ハイロ映写技師。「浅草任侠クラブ」会長。娘と「つけものクラブ」を結成。福島のにんにくきゅうり漬けをマスターする。おいしいよ。

『実は私はこう見られていました』

前田夏希の場合

このごろお父さんは、さつえいをするようになりました。木のはや、わた毛など、しょくぶつや、虫をとっています。お父さんは、休みの日、さかあがりをやっていました。

でも、しばらくたつとさつえいをはじめていました。わたしは、お父さんがスゴいなーと、思います。これからも、すてきなえいをつくってほしいです。でも、お父さんは、どうゆうえいをつくりたいかわかりません。でんぐりがえりをしながらとっているの、はじめて見た時は、びっくりしてしまいました。わたしはスゴクこんなことをしていたとは思いませんでした。また、これからどうゆうのをつくってくれるか、たのしみです。

前田夏希…長女、小学2年生。手話ダンス、鍵盤ハーモニカが得意。つけものクラブ会員。

最近一緒に観た映画：『崖の上のポニョ』

前田昂希の場合

昂希「(頼んだ原稿) 何で書けなかったのかは、パパのやっていることが、よく分からないから、質問してから書こうと思ったんだよ。そしたら出張になっちゃった。

前にとっていたとき(彼岸花の咲いている公園)、どっちのカメラでとっているのか分からなかった。(二台のカメラで撮影している)両方のカメラでとっていたんだ。」

私「撮影しているパパとパパが撮影した映像を一緒にしてみせるの。部屋でみたことあるでしょう。」

昂希「時々映しているのは見るけど、色が薄いから何が写っているのかよくわからない。映画をやっているのはわかるんだけど、たくさん撮ってるみたいだけど、よく付き合っていないから分からない。おもにどんな映画をつくっているの。」

私「自分で自分の事を考える映画かな。昂希のしているテレビとは違うでしょう。お話はないし、『ダーウィンがきた』みたく生物の生態をみせるわけでもないし。でも、さかあがりとかでんぐりがえりとか少しかぶるね。」

昂希「映画はどのくらいから興味をもったの。」

私「小学校4年の時に、お母さんに内緒でゴジラやガメラを見に行ったね。」

昂希「怪獣か」

私「昂希は見たい映画とかないの」

昂希「うーんないことはないけど、みれなくても、ビデオとかでみれるし…」

私「パパの映画みたいと思う。」

昂希「余裕があったら…、余裕はあるか。いまつくっているのきたらみせて」

私「わかりました。」

前田昂希…長男、小学4年生。読書、将棋、畑仕事、自然が好き

午前2時15分～

心動交差点～あわせる気持ち～

ビデオ使い 木村和代

心動交差点とはゲスト作家と木村和代が作品と言葉を交わすことで、会場に波を起こし、ゲストとこの時間「観客」である会場の人々の心を動かすコーナーです。

映像は、ほんとは目に見えない。
映像は、ほんとは手で掴めない。
閉じ込められた時間の塊を＜映像作品＞と呼んでいる。

閉じ込められた過去の時間を、現在に解き放つ。
上映することで、時間が時間に作られる。

時間ということに、想う私、木村和代が作り出す時間。
時間ということに、想う時間。

心動交差点は、この会場の心の動きが交わる時間。
過去の想いも、未来への想いも、
作り手の想いも、観客の想いも、
波となって交差する。

波の先が、また波として発生するように。
この時間は交差するところから始まります。

ビデオ使い木村和代 プロフィール
本名木村和代（きむらかずよ）。ビデオグラファー／映像使い
撮影しているとビデオカメラと会話ができます。編集していると素材の時間が語りかけてきます。それがわかるそんな映像使いです。予言のように言葉が降ってきます。それでビジュアルシャーマンなのかなあと。予知はできません。
映像は奏でるものだと想う。音楽に作曲、編曲という分類があるのと同じように映像の作映像、編映像を行う。ビデオカメラの録画時に静かに聴こえるモーター音が、映像と血流のリズムに合わせやすいので作品はビデオ作品、編集している時はオーケストラの指揮者になった感じがする。映像を身体に入れると内面から見える世界があって・・・時々シャーマン化する。

松浦から診た木村和代さん

- ・映画好き
- ・コーヒー好き
- ・お菓子好き
- ・お酒好き
- ・美少女好き
- ・KYな人嫌い
- ・細かい作業嫌い
- ・男の気持ちが分かる
- ・今の仕事は結構好き
- ・顔に似合わず強気な発言をする
- ・上司に噛み付く事もある
- ・でも後で反省している
- ・律儀な人
- ・頑張り屋さん
- ・たまにPCディスプレイを見ながらニヤついている
- ・猫耳に何らかのこだわりがあるようだ
- ・敵に回したくない
- ・好き嫌いがハッキリしている
- ・おなかが空くと眠くなる
- ・いつかカメハメ波を打てると思っている
- ・筋斗雲（きんとうん）を本気で呼んだことがある
- ・絶対に「〇〇〇行きます！」と言った事がある
- ・可愛い子を見ると頭の中でコスプレをさせている
- ・ふとした時に可愛らしい一面を見せる
- ・スカート姿をほとんど見た事が無い
- ・頼れる姉さん

筆者プロフィール
松浦 敢（まつうら かん）

30歳

木村さんの同僚で、おそらく良き仲間です。

職場では、木村さんが時折見せる変なクセ？に、ツッコミを入れながら楽しくやっています。

最近気が付いたことは、

自分の滑舌が悪い事とです。。
(`Д´)ゞ以上!!

(`Д´)ゞ以上!!

午前3時00分～

Dimension Trip (dub)

選ばれし神の子 なごみ

再撮影？

手段じゃないよ、もちろん映画を作る要素じゃないよ！

新たな世界は再撮影が作る！

まだまだ未開の地の再撮影はいまこそ全てとなる！

Dimension Trip (dub)は既に完成された作品（自分以外が作った劇映画、映像作品、CM等々）を再撮影し、新たに作品にします。

コーナーのテーマはあくまでも再撮影ですが、実はコーナータイトルの通り異次元への旅へと誘う事を一番のテーマとしています。

さあ、どっぷり浸かってもらいますか...

二回目はスタンリーキューブリック作品『時計仕掛けのオレンジ』です！

(お相手 スナミマコト、YOO)

選ばれし神の子 なごみ プロフィール

本名宮崎和海 (みやざきなごみ)。1982年生まれ。東京映像芸術学院卒業後、充電期間を経てハイロにはほぼ毎回出品するようになり、昨年夏よりハイロメンバー入り。

特技はレシピを見ずに冷蔵庫に有る物で夕食を作る。弱点は欲望に結構負ける。意外と負けず嫌いだけど新垣ゆいにはいつも負ける。

GHOSTYARDと言うギターデュオで音楽活動も進行中。2nd・EPが円盤とサンレインレコードで発売中です。よろしければお願い致します。

http://www.enban.org/shop/cart_pro.cgi?page_id=1&disp=on&mode=search&q=ghostyard

<http://www.sunrain-records.com/catalog-2187.html>

<http://profile.myspace.com/index.cfm?fuseaction=user.viewprofile&friendid=1000514335>

『実は宮崎和海はこう見られていました』

白石美和 (相方、同居人)

和海くんは第一印象は名前通り爽やかで癒やされる雰囲気を持った人だと感じたけど、意外と暗い部分と陰りがあります。

優しいところもたくさんあるけど、怒らせると凶暴で何をしでかすかわからない危うさもあります。暴力的な面が見えます。小姑みたいにうるさいところもあります (典型的なA型なので)。

少年のような心を持っていて、多趣味で多才です。洋服や音楽に対して好きなツボが未だにわかりません。たぶん私には一生わかりません。

映像に関しても、和海くんの作品に感情は感じとれないし、あんまり変化がない作品に彼が何を求め何を感じるのかは謎です。

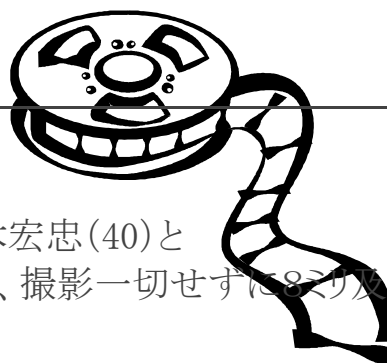
不思議な作品を作るなあと、ただただ感心と、作ってるときに何を感じながら作っているのか、脳みそを覗いてみたくなります。ナイーブで繊細な彼だからこそ作れる作品なのだと思います。編集集中の彼はイライラしている事が多いので少し近寄りたいたいのももう少し気を使って頂ければ幸いです。



いよいよ…さいご…ですな♪

午前3時45分ー

鈴木研究所



鈴木所長

“鈴木研究所”とは、グラフィック・デザイナー鈴木宏忠(40)と
“売れない漫画家”スナミマコトがカメラを使わず、撮影一切せず、8ミリ及び16ミリのフィルムに直接削ったり、塗ったり、
切ったり穴をあけたり、など様々な手法を用いて、表現の追求と
その探究の効果や手法をプレゼン形式で発表するコーナー。
そこにあるのは、技の巧みか？哲学か？
フィルムの美しさや奥の深さなどが
少しでも伝えていく事が出来ればと、思います。
8年目突入です。(お相手 ほしのあきら)

鈴木所長 プロフィール

本名鈴木宏忠(すずきひろただ)。アート・ディレクター／グラフィック・デザイナー。日夜仕事に追われるも、10年前にハイロに観客として常連となり、ほしのあきらの「30歳で作ってる人はやめないよ。」の勇氣ある一言で再び映像制作をはじめ。実際その通りである。

東京都北区のおふる屋(現在は駐車場)に長男として生れる。美大をめざすも浪人中に映画にハマってしまい“東京映像芸術学院”卒業。が、デザイン・広告に熱烈に興味をいだき、グラフィック・デザイナーとなり19年たつ。ハイロには98年に入団。ハイロのチラシデザイン担当。鈴木研究所所長。最近、ワンコを飼いだしました。

鈴木研究所・所長の嫁から一言

鈴木美樹

平日の深夜、ついソファでうたた寝をしていると、
ほのかなお線香の香りで目を覚ます。
見るとダイニングテーブルで、いつのまにやら帰って来た旦那さんが上映会の作業をしていた。
彼は慣れた手つきで、次々と小さいフィルムの1コマ1コマに職人技とも思える技術で穴を開けていく。これが実際に映し出してみるとなんとも言えない模様になっていて驚きなのだ。

実験映画なるものを私が知ったのは、旦那さんと付き合いだしてからだった。
初めて家で見せてもらった時に、あの小さいフィルムを壁に映し出すとこんな風に見えるのかと不思議な感じがした。
私自身はもともとアートが好きなので、この手のものに関しても興味を持た

が、やはり周りの友人や家族は口で説明してもなかなか理解が難しいらしかった。

結婚式の時に、せっかくだからとコーナーを設けて時間が短めの物を上映した。おかげで以前よりは少し周りにも旦那さんのやっている事が浸透してきたと思うが、完全に理解している者は少ないと思う（苦笑）でもそれだけ奥が深いという事だ。

私も何か手伝ってあげたいけれども、技術面でのサポートはとても無理なので、備品作成の手伝いや、素人なりのアイデアを今後出していこうかと思う。

特別付録 フィルムピクニック

スナミマコト

フィルムピクニックはお客さんに16ミリフィルムを渡して、何かやってみようコーナーです。何かやるのはど根性です。男なら、やってみなです。女なら、肝っ玉母さんです。今回から鈴木研究所の中でやる事になりました。鈴木所長と共によりフィルムへの考察を深めるため、いろんな作品待ってます。フィルムに触れる魅力をぜひ共有してみませんか？前回フィルムを貰った人は、上映前に持って来て下さい！（お相手 鈴木所長）

スナミマコト プロフィール

本名角南誠（すなみまこと）。1982年生8月15日まれ。岡山県出身。絵を描くのが好きだったが、デビッド・リンチを見て映画を作りたくなる。しかし大学に入って実験映画というものを知り、お金が無くても映画を作る方法を考えるようになる。そして始めたのが、カメラを使わず映画を作る方法。でも奥の深さにびっくりするやら、巨匠はいるので、毎回あたふたしています。因みに漫画も描いています。北冬書房より「幻燈」発売中です。



東京に出て八年、長いような短いような、色々な事が
思い出されます。

角南峰子(すなみみねこ)

幼い頃からハラハラさせられる事が多かった。
三才の時、兄の小学校の買い物で体育館に行った時、壇上から飛び下り、骨折
したのではとビックリさせられ、中学生の時には岡山で引ったくりに襲われる
し、自転車を乗り回して交番所に身元引き受けに行くし、大変だった。
又、吉本新喜劇に入って漫才をやるだとか、無鉄砲な事を言ったりしたりと、
思い出され、ぐっとこみあげてくるものがあります。

高校で、美術大学に行くのだと自分で決め、頑固な所もあり、自分の好きな道
に進んで、今があります。
一人前になるには色々大変だけど、くじけずに努力して、体に十分気を付けて
頑張っしてほしいと、父、母、兄と、田舎で応援しています。

(母自身、文章を書くのがとても久しぶりで、最初は書けないと言っていたのですが、
頼んで書いてもらいました。何度も読み返し、書き直したそうですので、短いですが。)

ピーマンの眼差し・サボテンの眼

YOO

すみません！！コーナー担当者の準備不足で、しばらく中止となります。
今までに無いものを目指しますので、どうぞご期待下さい。

YOO プロフィール

本名柴田容子(しばたようこ)。YOOカンパニー代表。100年の不況。社員一人の自転車操
業でも少しでもいただけるお仕事は大事にやり遂げます。おやし扱いの家族からのほじけもの
ですが、家族の協力があってこそその母を連日頑張っています。

ハイロはこのように、メンバーそれぞれが映画について考えることを形にして提示します。
そのパッケージに個性と魅力があるか、話し合いを繰り返しています。
興味のある方はメンバーになって自分のコーナーを作ってください。
パッケージについての不満、励まし、意見などあれば、どうぞフリースペース欄にあるメール
でお願いします。

あなたが証人



明日の作家になる・・・かも知れない。

アピアは1970年、スペース・ラボラトリー・ヘアーとして生まれ、舞踏・演劇・映画・パ
フォーマンス・その他多くの表現の実験工房として、アンダーグラウンド文化を育てて来ました。
近隣からの苦情や内容に対する体制の抑圧に抵抗しながら、経済的な圧迫から仕出し弁当やパ
ーティ会場としての別の顔を持った時期も経て、丸39年。ずっと〈これからの表現者〉に目
を向けた場でであり続けています。
新たな地・碑文谷での再開は抗い続けるアピアの展開と発展でもあります。
寄生虫ハイロも同様であらねばなりません。よろしくお見守り下さい。

大房さんの

映画鑑賞入門／前編

あなたは年間何本くらい映画を見ますか？

私はせいぜい数十本ですが、今はいつでもどの時代の作品でもDVDで見ることが出来ますから、多い人は200本くらいは見ているんじゃないでしょうか。

映画館が特殊な場所でそこに行かなければ映画を見ることができなかった時代から、本と同じように封切（新刊書）＋ライブラリーという時代になったのです。でもそのように大きく受容環境が変化したのに、見た映画を自分の中のどの位置にどういう順番で刻んでいくか、つまり自分の「映画感」をどのように構築するかについては、あまり模索されてこなかったように思います。

しかし、受容環境が変われば見方も変わります。

そこで現在の受容体験を考えてみると、ある方向が見えてきます。それは「膨大過ぎ、自由過ぎ」です。

現在は過去の作品でも、めばしいものはDVD化されています。そのすべてを見るわけにはいかないし、主だった映画だけ見たとしても、全体像を把握するのが難しい時代です。映画館だったら新作が次々と公開されていきますし、名画座ではある種のテーマがあります。何年か映画を見続ければ、同時代の映画を感じ、それを手がかりに受容体験を深めることができます。

しかし、ライブラリー化したビデオ店では分類方法が定まっておらず、連続性が絶たれてアイウエオ順に並んだDVDからは監督やジャンル以外には「手がかり」が見えないのです。そしてさらに問題なのは、それで不便かというところではないということです。検索エンジンが優秀なので情報はすぐに調べることができます。つまり、自分はあたかも映画をたくさん見て自分なりの映画感を持っている人間のようにふるまえるのです。しかしこれは記憶中枢がネット上に出て行ってしまった人間のような状態です。「感じるだけで良い」というお子ちゃま的な扱いをされているわけです。これでは、それぞれの人が、自分の出会った乏しい映画を並べて狭い映画感を作るしかないでしょうし、ハイロのような情報化されていない映画に出会うと、はみ出してしまおうでしょう。

もう一点の「自由」で言うと、今の映画評の多くは、文脈から離れて観た人が自由に価値を作り出すのだという考えです。この「受け手による再構築」という視点は、映画に限らず音楽や文学など今の受容体験としてはむしろ主流でしょう。

この考え方は、いわゆるポストモダン以後、つまり、一通り知っている人たちがそれまでの価値を否定するという形で出てきたものです。この見方は、無知の輩とインテリが同じ土俵で語りあえるという、とても便利な一面を持っていたので、メディアなどで多用されて定番となりました。

しかし、これではいつまでたっても子供っぽい受容体験、感受性はあるが理解力や記憶力がない、という地点から抜けられません。つまり、面白い、怖い、

笑った、とは言えるが、どのように評価していいかわからないという観客が増えるのです。

そこから出ていくには、まずは初歩的なところから、見た映画の関係性を考えるあたりから始めることです。

たくさんの映画同士の関係性をとらえるためには昔から2つの視点、時間軸にそった視点と、空間的な視点がありました。

時間軸に沿った視点では、ある作家の作風の変化や作品同士の関係を見ます。また、ある作品が過去の別の作家に影響を受けているという関係もこうした通時的な視点から考えられます。クリント・イーストウッドの「グラン・トリノ」を見た後、過去へとたどって「ハートブレイク・リッジ」や「許されざる者」へと戻していくといった感じです。また別の作家との関係では「ハートブレイク・リッジ」と、同じ設定・展開の「特攻大作戦」をネットや文献などで発見するのも楽しいです。実験映画好きのハイロメンバーとしては、マヤ・デレンの「午後の網目」もDVD化されていますので、そのあたりとハイロ作品を比較するなど面白いと思います。

もう一つの空間的な視点は、時間軸のある一点で横のつながりを見る視点です。同時代の作家同士が影響しあったり、近いテーマや作風の映画を作るという現象です。ヌーベルバーグなどのムーブメントがそうですが、時代や社会状況など幅広い分析ができておもしろいです。そういえば、そういったムーブメントが見えにくくなっている、というのは逆に今の時代の特徴とも言えるのではないのでしょうか。

この2つは当たり前のように、今では意外と行われていない並べ方です。もう一度トライしてみてもいいんじゃないかと思います。

もう一つのアドバイスは、あえて「積極的な誤読」をしよう、ということです。受身で作品を見るのではなく、その回りや背後にある作品や作家、時代を探っていく姿勢を持とう。それが間違ってもOK。とにかく気になったらそこから「次の場所」をたどっていこう。ということです。

(つづく)

うじうじ物語

神山昇

2) あいまいな記憶、 ハイロとの出会い

「渋谷スペース・ラボラトリー・ヘア」は放送作家、片岡輝プロデューサーのかけ声ですべて着々と人が集まってきた。「劇団俳優小劇場」、「劇団つんば棧敷」、天井棧敷を抜けてきた「高橋敏昭」等の演劇系。「三浦一壮率いるVAV」、「矢野英征（後グループMA）」等のコンテンポラリーダンス系や「小杉武久、タージマハル旅行団」等の前衛音楽系、「五月女幸雄」等のアヴァンギャルドアート系と言った蒼々たるメンバーが表現の場としていた。

大学はドロップアウト、快楽を求めて働く気の全くない僕は、友人「高島史雄」達と東京大田区の廃工場を無償で借りて共同生活をしてきた。俗に言うヒッピー生活。そこでは大学の友人を頼りに前衛舞踊の美術や演劇の宣伝でなんとか暮らしていた。

時は遡るが「日宣美」という広告デザイン界で有名な美術展が、大学の在学中に権威主義であると粉砕された。僕の作品などは足元にも及ばない。「亀倉雄策」、「横尾忠則」、「栗津潔」等の作家群に認められるわけではない。そんなハナから思いこむ卑しさから、逆にその運動のシンパになっていた。そして、日大闘争。さらに、1968年頃「フィルム・アート・フェスティバル東京」という小型映画（8mm、16mm）のアート作品を公募し、優秀な作品に賞を与え、しかも草月ホールで上映もするという催しがあった。その年の最優秀作家は「大林宣彦」。

安易で志も希薄な僕の作品は、当

然、端にも選ばれなかった。ますます、卑しさ、嫉妬心は増幅されていた。

その頃、渋谷という最高な場所を得た僕は、今までチマチマと撮り貯めていた作品を上映していた。しかし、入口の張り紙だけの安易な上映会である。案の定、まったく客がこない。「これがアンダーグラウンドだ」と居直ってはいたが。

ある日、工場の持ち主の息子から「おまえと同じような映画創ってる奴がいるぞ」と「ほしのあきら」を紹介された。たしか1969年暮れか、1970年の冬、大阪万博前夜だった。僕はすぐに「渋谷スペース・ラボラトリー・ヘア」で上映しないかと持ちかけた。

「賞なんか獲れなくても上映できて、一人より二人の方が客が集まる」。他力本願の最たる僕はひとりごちた。

これが僕がハイロを立ち上げるきっかけである。もちろん「ほしのあきら」の考えではない。

僕のモチベーションは、作品より警官の目を逃れながらの街なかのビラ貼りが反体制的で愉快だったし、渋谷警察から「ハイロ」は反体制危険分子が集まっていると見られる等、その時代の格好良さを味わっていただけかもしれない。

ほしのあきらの作品の手法、表現への飽くなき探求心は、有名大学を途中でやめてまで、専門学校へと移る意志からも読めていたし…。

だから、長くは続かなかった。

1971年、美術家五月女幸雄は「ザ・ボディ―人間商品―」を渋谷スペース・ラボラトリー・ヘアで展示した。鉄パイプを足場にし、棺桶のような箱に白塗

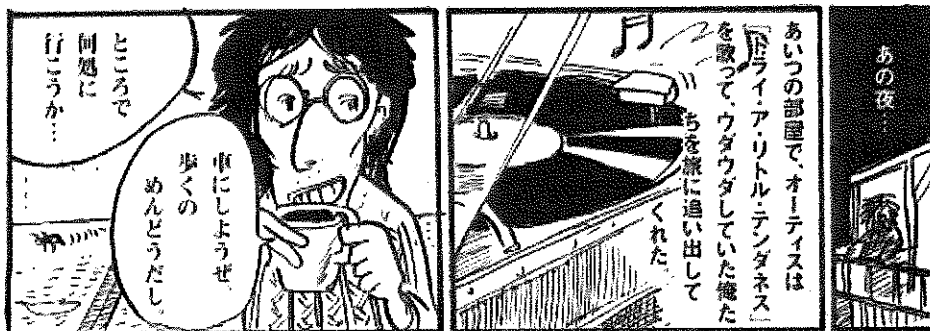
りの人を入れて高く持ち上げる。そして天井に張り巡らせた鏡に映った人間を鑑賞するという仕掛だ。ところが客から警察に通報。「わいせつ物陳列罪」で、モデル、作家、主催者が渋谷警察に現行犯逮捕。とんでもない事態が起こった。照明操作を手伝っていた伊東哲男（現アピア代表）も逮捕拘留された。このことがきっかけで「渋谷スペース・ラボラトリー」の知名度が高まったが、相対して運営仲間との連帯意識が僕の中で希薄化していた。

原因のひとつ。五月女幸雄の作品に参加していた女性をモデルに、写真集「卒塔婆小町」を盟友「高島史雄」と制作中だった。全ては印画紙で150部。表紙は僕の担当である。当時としては破格の費用をかけて印刷した。ところが、あの事件が原因でモデルとなった彼女から出版の取りやめが言い渡された。もちろん無理矢理頼んだ僕らには懇願する以上のことは出来なかった。そして多額の借金を印刷屋さんにしてしまった。

ここから神山の商業主義が始まった。金にならないことに興味を失う。

伊東哲男に「渋谷スペース・ラボラトリー・ヘア（後にアピア）」の運営を押しつけ、「ハイロ」は、ほしのあきらに押しつけた。「瞬間ハイロ」だけはやるからと、何やかやと言い逃れていた。

その後、立て続けに災難が降りかかる。実家の経営が苦しくなり、家族で乗りきるから戻ってこいと強制的に言い渡された。ハイロのメンバーでもあった「居村世紀男」等4人で営んでいた「(株)DO-HOUSE」も経営的に目鼻が付きだし、週刊漫画アクション（双葉社）や週刊サンデー毎日（毎日新聞）に連載が始まった矢先だった。



日本海のかたつむり

第4回

神山昇



そんなには
高くないよ、
約四階かな、
それよき、
ここから
滑り降りない？
落つころるようで
気持ちいいよ、
きつと。

広いだけじゃない、
この高低差は
なんじや、
ここからだど
ビル七階は
あるんじやねえか、

鳥取大砂丘か…
こんなだつ広い
砂漠が日本に
あつたなんて、
信じられねえな、
しかも、何処までも
続いていると
思つたら、
こりやなんだ。



寿命が
縮まったなあ
そろそろ
車に
戻ろうか



ちよつと
待つて
変な
穴ぼこが
あるぞ、

こりや、
蟻地獄じや
ねえかな、

はい

お知らせ

○次回は11月27日(金)

ケツが痛えぞ！ オールナイト上映会

フリースペース→創れ！発表の場はここにある

出張クラブ→目指せ、普通の日常映画。

心動交差点→ゲストと私が波を起こして心を動かす

Dimension Trip (dub) →ウォー再撮影だウォー

鈴木研究所改→カメラ使わず頭と手で映画を

探す。+フィルムピクニック

忘れちゃならない、新コーナーも待機中。

アピアは APiA FORTY 新しい空間作り

お邪魔虫ハイロも何か変わるか？変わらないのか？

偉大なマンネリ！ハイロは進む

<http://www.hairo.org/>または上映集団ハイロで検索を。

瞬刊ハイロ 編集後記



6代目編集長 ほしのあきら

誌面を変えつつありますが、まだまだ納得力が生まれません・・・

メンバーの身近な人たちの文章は、それぞれの思いや距離が見えて、いいものになりました。ここで改めて皆さんに感謝すると共に、お母さん、奥さん、娘と息子、同僚に同居人さん、彼らを暖かく見舞って下さーい！と、これは他人事ではありません。

大房さんの映画鑑賞入門は、その映画とのスタンスに感心します。こういう人がバックにいるから私たちは好き勝手の暴れられるんだなあ、改めて痛感します。だから、もっと暴れようや！

ブラウロートの草野さんは、彼女の描く自画像が好きで知り合いました。素朴に作ることと見せることの柱を持っているなど、見習わなければと。本当に何も無い「泉」で自分を確認しながら探しながらギャラリー運営は地域にとっても大事なもので、ぜひぜひ頑張ってください。またハイロが行かれたら嬉しいと思っています。

表紙と[うじうじ]とマンガの盟友神山ワールドは如何ですか？私はその鋭さとわがままな論理にジェラシーを感じ続けているのです。本気になったら手に負えない・・・

私のことは今回余り出しませんでしたが、実は次回作で詰まっています。なあに負けるもんか！酒飲みの腹には酒の虫がいる、このほしのあきらの腹ン中あ、

大腸ポリープでいっぱいよお！！

またお会いしましょう☆

・・・個人的なお知らせです。☆の**太鼓の虫**です。

冬のどどんが団 **和太鼓ライブ** 作曲:ほしのあきら

異空間は良い、空間 **Part2!**

どどんが団がやって来た！ヒョンヒョンヒョン！

もう本気 もらって下さい 元気

受けて下さい 楽しさ・激しさ

観に来て良かった空間、作ります あなたが証人

● とき 9月23日(水) 午後6時30分～8時30分

● アピア40

● 1500円+ドリンク代